

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会 事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

第47回北海道博物館大会 特別講演要旨

7月24・25日、伊達市で開催した北海道博物館大会でお話をいただいた、伊達市噴火湾文化研究所長 大島直行氏による特別講演「これからの博物館づくりを展望する—市民協働の博物館づくりは可能か—」の要旨を紹介させていただきます。

3年前に噴火湾文化研究所という施設を伊達市が立ち上げた。全国で市町村立の文化研究所は、この施設だけ。現在、正職員9名。3人の学芸・専門職員がいる。

伊達市で博物館大会を開催いただいた博物館協会にお礼を申し上げたい。もう一つ、会員の皆様方の後ろにいる伊達市民の皆様方にもお礼を申し上げたい。改めて、伊達市民の底力を見た思いがする。講演のタイトルは、「これからの博物館づくりを展望する」。大事なものはその横の副題「市民協働の博物館づくりは可能か」で、市民がここまで博物館に関わるという事は全国的に見てもそれほど多くはない。市民が本当に喜べる、この町をどういうふうに進展させていくかという視点に立った時に、この町のためになる博物館はどうかという事を10年間考えてきた。それと、伊達市の取り組みを紹介したい。

博物館の疲弊の大きな原因の一つは、財政問題。博物館・図書館・美術館も安閑としてられない。二つ目は運営。行政の中の博物館の館長は、なかなか位置が定まらない、運営面での疲弊も十分に大きな原因としてあげる事ができる。もう一つは、指定管理者制度、民営化問題がある。一見、前向きな取り組みにも見えるが、博物館が生き返ったという例は、あまり聞いていない。最後に、最も大きな課題は、学芸員の意識改革。

私が考える課題とその解決方法を話させていただく。一つは、三つのステータスの確立という事。一つは組織。一つは市民。一つは企業。一つ目の組織については、役所は、他の職員、税務課の職員、企画課の職員とも一緒に目線をあわせて仕事

をしていくというのが大切。まず認めてもらう。その上でアピールしていくことが必要。次に市民。市民に理解をしてもらわないと駄目。文化財に関するボランティア団体は五つある。延べ人数で約400人ほど。ボランティアの団体は文化財行政と一緒にやっている人達。決してお手伝いではない。最後が、企業。企業は、文化じゃ飯食えないという発想がある。そういうところに食い込んでいかなない限り、総合的に伊達市の文化を底上げする事にはならない。企業に理解を求める事が、文化財行政の裾野を広げていく大事なステータスの一つ。この三つのステータスを確立しなければならない。

次に、博物館が疲弊している大きな原因について。分かりやすい博物館づくりというのには、疑問がある。分かりやすくする事によって本質が失われていないかという事もチェックする必要がある。

本質的な事を伝えれば人は疑問を持ち勉強を始める。市民との関係を築いていくという意味では分かりやすくすればいいわけではない。市民に本質を伝えるのが学芸員の仕事。体系的に物を考えられて体系的に物を書くことができることが、学芸員の大きな役割になる。論文に書くという事をしない限り、学芸員ではない。伊達市では学芸員を研究所に所属させた。学芸員には本質が見える仕事をして欲しいという事。市民が勉強するきっかけとなるのは学芸員。

伊達市の取り組みとして三つの質の確保というものを持っている。一つは学芸員の質を高める。学芸員のための研究環境の整備。現在学芸員の一人が社会人枠の大学院に行っている。大学を卒業して博物館の学芸員になってからがスタート。論文を書けるかどうか、そうしないと、市民に納得してもらえない。管理職、とくに館長の立場というのが重要。学会の参加も公務で行くように義務づけている。公務に認めないところもあるが、そんな事をしていたら博物館はいつまでたってもステータスは上がっていかないと思う。そのかわり、ちゃんと報告させる。市民に見えるようにしている。もう一つは、共同研究。今は東北大学の東ア

ジア、東北アジア研究センターと提携を結んで共同研究をしている。

二つ目は、情報の質を高めるという事。一つは学会の開催。2003年に日本人類学会を開いた時には、150人の市民ボランティアの方々が受け入れ態勢を作ってくれた。それが母胎になって、「かけはしの会」という、この大会をサポートしているボランティアの立ち上げに繋がった。もう一つ、シンポジウム・講演会とか講座をまめに開く。こんな地味な大会のテーマにも市民が足を運ぶのは伊達市民の見識が高まってきた証拠。それが学芸員を後押しする。

そして三つ目、市民の質をあげる事。新しい博物館を構想しようという時には、学芸員だけでは駄目。市民の質が上がらないと、いつまでも「分かりやすく」という自縛から逃れる事はできない。伊達市はひと味違った市民学芸員制度を発信している。市民学芸員には、質の高い論文をきちっと書いて、その論文審査によって、最後は市民学芸員の称号を差し上げるという事をやっている。現在、10人の方がトライしている。そうやって市民のレベルをどんどん上げていって欲しい。子供達のレベルをどんどん上げていく事も必要。

最後に私の10年間の取り組み、伊達市の最大の懸案事項について。私の中では総合文化展示館という仮称で説明している。これは、全く私の考え方。計画が実施できる段階には、間違いなく市民の皆さんと新しい博物館を模索するという形になる。その中で市民に提案したいのは、まさに総合文化の時代が来るんだということ。もう一回、文化とは何かということから考えていく必要がある。文化には上、下なんてない。どれもみんな大事なんだということをもう一回、原点に返って勉強してもらおう姿勢を、環境を調べていく必要があるんじゃないかと思う。そういう願いも込めて、従来の博物館でもない、美術館でもない、資料館でもない、音楽ホールでもない、能楽堂でもない、色んなものすべての文化を複合した情報発信基地はできないかという思いもあって、実は文化研究所というのを設立した。この文化研究所は、現在、三年経過した。こういった思いを一つの資料館として形にできないかというのが、私の構想である。最後に、市民の皆さんにお願いしたい。伊達市に博物館をつくる機会を私に与えてくれればと思う。

(事務局 小林孝二)

道央ブロック
News

高校生向け副読本の発刊と反響

財団法人北海道文学館（北海道立文学館指定管理者）は、今年三月に高校生向け副読本『ふるさとを読む 北の人間 北の文学』を発刊し、四月には道内の全高等学校・高等専門学校各校と、国文学・日本文学系の学部・学科がある大学・短大に見本として一冊ずつ寄贈した。

北海道には膨大かつ貴重な有形無形の文学財産があるが、それらが次世代にうまく引き継がれているとは必ずしもいえない面がある。このままでは郷土の文学活動の裾野は小さくなり、文化の継承が断絶することにもなりかねない。読み手の営みに限定して考えてみても、北海道の文学には素晴らしい作品が数多くあるのに、次世代に読み継がれていない作品が少なからずある。それゆえ、文学館が北海道の文学教育のフラッグシップとなり、児童生徒向けに文学教材を提案したり、学校教育のニーズに応えるものを積極的に提供したりする役割を果たすべきだろう。

博物館と学校との関係は、どうしても「博」が従、「学」が主になりがちである。しかし、「博」の専門性・継続性・実績等を基本にした児童生徒用学習プログラムや教材を、より大胆に学校に提示することは有効で、そのためには、学校関係者

との人脈づくりと人的交流が不可欠だと思われる。

副読本の編集委員は現役の高等学校国語科教員等をお願いした。読みものとしても学習テキストとしても扱えるような本を目指し、社会人の生涯学習にも対応できるものとした。

編集会議は計十五回を数え、刊行まで一年半に及んだ。最も多くの時間を費やしたのは作品選定であった。教科書とは違うので、思いきって全文を載せた作品もある。選ばれた作品に何度も目を通したが、どれも素晴らしいものばかりだと今でも思う。生徒のみならず、大人でも楽しめる本に仕上がったと自負している。また、この副読本は編者の文学館と出版の尚文出版との話し合いにより、実際に生徒が手に取って読むことができるものを想定したため、廉価となっている。

刊行・寄贈後はマスコミからの取材や市民からの問い合わせが相次いだ。市民の要望を受け購入した図書館もある。小口ではあるが早速団体購入をしてくれた高等学校もある。大学・短大数校ではゼミで採用してくれた。今後も各学校や生涯学習の場で大いに活用されることを願っている。

(北海道立文学館 社会教育主事 鈴木 浩)



道南ブロック
News

平成20年度 道南ブロック博物館施設等 連絡協議会総会及び研修会について

渡島、松山管内の博物館や郷土資料館などで構成する道南ブロック博物館施設等連絡協議会（会長・長谷部一弘・市立函館博物館長）の本年度の総会及び研修会が7月8日、9の両日、せたな町大成区で開かれ、会員や一般の人14名が参加した。

8日は大成総合学習センターで平成20年度総会を行い、平成19年度事業報告・決算報告および監査報告と平成20年度事業計画案・予算案を審議した。

総会終了後「社会教育活動と博物館」をテーマに研修会を行った。

I部は「『博物館法等の一部を改正する法律案』成立にともなう社会教育活動の今後」についてというテーマで講義した。

講師を務めた小樽市総合博物館の土屋周三館長は、博物館法の改正にともなうこの博物館



講義する土屋館長

館のあり方やどのように対応していったらいいのかをパソコンや文書資料を活用しながら説明。

「地方の博物館や郷土資料館は地方文化や歴史を継承していくうえで最後のとりで」等の話しをしながら施設の役割について話された。

II部のフォーラム・ディスカッションでは、三浦孝一八雲町郷土資料館学芸員がファシリテーターとなりI部の土屋氏の講義を題材にして会員相互や講師との間で真剣な討議を行った。特に登録博物館以外の博物館等施設で学芸員と名乗るのは詐称だとの発言があったりもし、白熱した議論でまたたくまに時間が過ぎた。今回の研修会で、これからの学芸員は収集した資料の調査研究の成果を活用する能力とともに、地域や学校と連携を深めるコミュニケーション能力の向上をはかる必要があることをあらためて認識した。

9日は江戸時代の円空や民俗学者菅江真澄や探検家の松浦武四郎も訪れている同区の太田神社を見学した。

太田神社は断崖絶壁にそびえる帆越岬に面している太田山（485m）にある道南五大霊場の一つ。

参詣するというより登山するといったほうがふさわしい霊場である。最後の崖に垂れている鉄の鎖に足をかけて登るといふ荒行に近いことをして参拝した。

残念なことに参詣する余力のあったものは、参加者中わずか3名というありさまだった。

（知内町郷土資料館学芸員 高橋豊彦）

道北3管内
News

森林セラピーフォーラムinふらの ～身近な森に人を誘う～

富良野市は市域の7割を森林が占める北海道中央部の田舎町らしい豊かな自然環境にあります。そんな我が町には市民に開放された、自然に触れ、学習や散策することができる自然公園や自然散策路が整備された場所が比較の数多くあります。しかし、植物や野鳥の観察などで頻りに訪れる一部の方を除けば、これらの公園はその魅力を伝えきれないままで活用されず、市街地と郊外の自然という、日常と非日常の空間的な対立関係にあるように以前から思えてなりません。その一方で、ここ数年来の景気低迷と健康ブームのためか、富良野でも年齢・性別を問わず公園や河川敷を歩いたり、ランニングする人が増えてきたなど感じていたところでした。そこで、これはチャンスと思い、身近な自然と市民の距離感をもう一步近づけ、郷土の自然への愛着を育んでもらうことを目的に、いつもと異なる視点から開催したのが標榜の講演会です。

本講演会は6月14日（講演会）・15日（散策）に整備された散策路も備わった市内郊外の温泉保養地「ハイランドふらの」を会場に開催しました。

この森林療法とは、ヨーロッパ、特にドイツで行われている事例なども参考に、これまでの「森

林浴」という癒しのイメージから一步踏み出して「予防医学」「保養・健康増進」「ケア」「治療」

「療育」などの観点から人間に作用するより具体的な効果を期待したもので、日本国内でも各地で導入されつつあります。北海道内では先進的に、しもかわ森林療法協議会やNPO法人中頓別森林療法研究会、鶴居村の山崎山林などで予防医学、健康増進、まちづくりなどの視点から官民の相互協力によって積極的に取り組まれています。講演会では東京農業大学の上原巖さん、札幌国際大学の林美枝子さんから基調講演を、さらに中頓別町国民健康保険病院院長の住友和弘さん、しもかわ森林療法協議会の奈須憲一郎さん、山崎山林森林セラピー推進会の山中慎一郎さんから、それぞれの町での実践報告をいただきました。

森林療法については、通常医療を補完あるいは代替する療法としての位置づけやその効果・効用に関する科学的な実証、検証作業がこれからの段階にあります。しかし、私は多くの人が再び身近な森と真剣に向き合うための第一歩として有効な手段の一つではないかと考えています。自然とは本来もっと厳しいもので、レクリエーション的な発想はオーバーユースを助長するだけとの指摘もあるでしょうが、今後の自然観察会では、このような視点も取り入れながら人と森を繋げ、ともに考える仲間が増えていくような事業展開をしていければと思っています。

（富良野市博物館 澤田 健）

日胆地区
News伊達市開拓記念館
特別展「貞操院展」

伊達市開拓記念館では、平成20年9月17日～30日まで特別展「貞操院展」を行った。これは同期間、宮尾登美子文学記念館において行われた「NHK大河ドラマ篤姫と宮尾登美子展」の併設展として亘理伊達家14代当主夫人・貞操院保子に焦点をあてた展示である。

貞操院保子(1827～1904)は天璋院篤姫(1836～83)と同じ幕末～明治の激動の時代を生きた、仙台藩最後の藩主伊達慶邦の妹であり、明治初期に伊達へ移住した亘理伊達家の14代当主邦実の夫人であった。戊辰戦争における敗戦により、北海道移住を余儀なくされた際、15代当主邦成の反対を押し切って移住に同行。亘理伊達家を陰から支え、苦しい生活を強いられていた家臣や女性たちにとって彼女の存在は精神的な支柱となった。

展示は常設展示を一部利用し、貞操院遺品を中心に140年前における武家女性の生活を表した。また、年表により篤姫との対比を行った。

メイン展示資料は「懸守(かけまもり)」である。これは身に付ける者の安全などを祈願した筒守を

絹製の袋で包み、首から提げて使用するものである。

これまでこの資料は貞操院遺品であると伝えられていたが証拠がなかった。しかし、筒守に貞操院の幼少の呼称「於祐」という名前が記載されていた文書が同封されていたことから、これが貞操院遺品であると裏付けられた。

伊達市開拓記念館には、この他にも江戸～明治時代を中心とする貴重な資料が数多く存在する。今後も種々のテーマを設け、魅力ある展示を行っていきたい。



白地四つ花菱文様織子懸守

(伊達市噴火湾文化研究所 黒田格男)

をテーマにしたこのフォーラムは、昨年、松前町で開催されました。「夷酋列像」が描かれる直接の原因となったクナシリ・メナシの戦い(1789年)の際、和人を殺害したアイヌ民族37名が根室市ノッカマップで処刑されており、いまなおアイヌの方々によって犠牲者に対するイチャルパ(慰霊祭)が行われていることから、当地での開催になりました。

講演では7名の講師が壇上に立ち、5名のコメントーターが補足を行うなど内容の濃いフォーラムでした。参加者も根室市内外から109名の参加を得ることができ、このテーマに対する関心の高さを伺うことができました。今年は衆参両院において「アイヌ民族を先住民と認める決議」が全会一致で可決されるなど、アイヌ民族の権利回復における大きなメルクマールとなった年です。そうした年に開催された道東のアイヌ史に関するフォーラムの意義は大きいと考えています。



研究フォーラム「夷酋列像と道東アイヌ」討論の様子

(根室市歴史と自然の資料館 学芸員 猪熊樹人)

道東3管内
News

根室市内での歴史フォーラム

平成20年11月8日(土)に「根室弁天島オホーツク歴史フォーラム」を道立北方四島交流センターで開催します(主催:同フォーラム実行委員会、共催:道東3管内博物館施設等連絡協議会、根室市教育委員会)。このフォーラムは、オホーツク文化期の著名遺跡の一つである弁天島遺跡が、学術発掘130周年を迎えることを記念して開催するものです。

弁天島遺跡の調査は明治11(1878)年にイギリス人地震学者ジョン・ミルンによって行われました。ミルンは千島列島に調査に行く際に弁天島遺跡を発掘し、その成果は「英国人類学協会誌」に報告されています。一般に日本で初めての学術発掘とされるエドワード・モースによる大森貝塚調査の翌年に行われた調査で、国内でも古い学術調査例となります。報告によれば、発掘したオホーツク式土器を縄文土器と区別するなど、オホーツク文化研究史上で重要な指摘を行っています。そうした学史上有名な遺跡ですので、これまで弁天島遺跡で調査経験をもつ研究者を中心に招へいし、弁天島遺跡を中心としたオホーツク文化期の社会や生業を紹介してもらいたいと考えています(問い合わせは根室市歴史と自然の資料館tel:0153-25-3661まで)。

また、去る平成20年9月27日には「研究フォーラム 夷酋列像と道東アイヌ」が開催されました(国立民族学博物館、人間文化研究機構連携研究、根室市教育委員会共催)。蠣崎波響の「夷酋列像」

網走管内
News

北網圏北見文化センター 美術館事業「アートカレッジ」

網走管内博物館連絡協議会では、ここ2年間、北網圏北見文化センターにて開催される美術企画展の講演会に合わせて総括研修会を開催しています。総括研修会を北見で開催することは例年のことですが、美術企画展の講演会に合わせて、というのは昨年より始めたことでした。これは、北網圏北見文化センターの美術企画展開催中に「アートカレッジ」と称する講義形式の講演会を開催するようになったことに端を発します。

これまでの内容は表の通りです。

北網圏北見文化センターは北見市が管理運営を行っている公的機関ですが、北見市を中心とする4町と網走市を中心とする4町に住まう市民に対し、より開かれた社会教育の場を目指し事業を展開しています。文系大学が無く、文化芸術の専門機関がどちらかといえば少ない当地では、芸術文化に関する専門的な講座や講演会の開催頻度が少ないのが現状です。しかし、市内には芸術文化活動を行っている市民団体が多くあり、より専門的な刺激を求めている市民が多いのが事実です。昨今の博物館界の流れからすると、「坐学」よりも「体験型」なのかもしれませんが、当地の状況やニーズからすると、より専門的な学習機会の提供が適当なのだと思います。成人層が達成感をともなった学びを経験できる場になることが、今当館

に課せられている課題と考えます。

当館ではこれからも展覧会の開催にあわせて、少しずつですがより専門的な学びを得られる場の提供に努めていきたいと思えます。

この活動を総会で経験していただくことが、網走管内の芸術文化のこれからについて博物館ができることは何か、考えるひとつのきっかけとなり得ているのであれば幸いです。

平成19年度美術企画展 『ヨーロッパ絵画展～天使がいた時代～』	
①	6/17(日) 14:00～16:00 (展覧会基調講演) 名画の楽しみ～バロックから近代へ～ 千足伸行氏(成城大学教授、展覧会監修者)
②	6/30(土) 14:00～15:30 西洋画における技法～画家の視点から～ 相田 幸男氏(北海道教育大学教授、独立美術協会会員・審査員)
③	7/14(土) 14:00～15:30 聖性と日常～ヨーロッパ絵画鑑賞の手引き～ 谷古宇 尚氏(北海道大学准教授)
④	7/28(土) 14:00～15:30 スペインにおけるバロック 園部 容子氏(北海道立帯広美術館学芸員)
平成20年度美術企画展 『魯山人の宇宙展』	
①	6/28(土) 14:00～16:00 (展覧会開催基調講演) 「魯山人」その人生と人物 大下 智一氏(北海道立函館美術館主任学芸員)
②	7/6(日) 14:00～15:30 日本人の美意識～かぶきと茶の湯を中心に～ 小栗 祐美氏(北海道教育大学教授)
③	7/12(土) 14:00～15:30 土と人～陶芸のはなし～ 瀬戸 厚志氏(釧路市立美術館学芸員)

(北網圏北見文化センター 学芸員 木戸 歩)

動物園・水族館
News

50周年を迎えた のぼりべつクマ牧場

1958年、加森勝雄社長の考案により建設された、のぼりべつクマ牧場は、今年50周年を迎えました。設立当時は、北海道のヒグマ絶滅政策で春グマ駆除の最盛期。捕獲奨励金も出され、クマ1頭を捕れば今の100万円にも相当し、現在の2倍である600頭前後が捕獲されていました。このままならオオカミのようにヒグマもいずれ絶滅してしまう、今のうちに北海道ヒグマを飼育して保存しておこう、という加森社長の考えで、クマ牧場が建設されました。

野生のヒグマは行動圏の広いオスでは数十キロもあり、2年間の母子と1週間ほどの交尾期以外は単独生活をします。北海道で陸生最大のキムンカムイ(山の神)として畏怖されていたヒグマを集団で、しかも家畜化してみせようという考えは世界の何処を探してもありませんでした。当時の動物学の権威者、犬飼哲夫初代北海道開拓記念館館長も加森社長のアイディアに「ヒグマは最強の猛獣、それは無理でしょう。」と言われたそうです。

しかし、その後も道の政策である春グマ駆除奨励で、母グマが捕殺され、その孤児がどんどんクマ牧場に集められ買い取られ増えていきました。しかも1966年には繁殖に成功、牧場内では自由に

交尾が出来たため、どんどん数が増えました。

牧場として資源化を考えた時期もありましたが、野生動物であるヒグマの家畜化は世界からも日本の人々からも受け入れられませんでした。

お客様の求める方向に博物館も動物園、水族館も変革できなかつた時、衰退が始まるのでしょうか。

1984年のヒグマ博物館建設当時は動物園の中に博物館を作ることは先駆けでした。今は動物科学館など名前は多様ですが博物館の要素である、研究、保存、展示、教育普及活動は当然となりました。学芸員も増え、環境問題の解決や野生動物の保全をその生息地で行うことを目指す新たな挑戦もコウノトリのように実を結び始めています。



50周年記念特別展開催中。是非ご覧下さい。

(ヒグマ博物館 学芸員 前田菜穂子)

学芸職員部会
News

大先輩 中村齋さんからのラストメッセージ
平成20年度
学芸職員研修会 知内大会より

去る9月25日、26日の両日、渡島管内知内町で第31回目となる学芸職員部会総会・研修会が、加盟154人中34人の出席者をもって開催された。

研修テーマは「今、博物館教育について学ぶ」。講師は、06年に日本博物館界最高賞の棚橋賞を受賞された、われらが財団法人アイヌ民族博物館の中村齋館長で、「博物館教育とは一地域の研究者であり教育者でもある学芸員のあり方」と題して講演をいただいた。同館長は10月上旬の同博物館理事会で任期満了となることから、これが公人として、われわれ博物館人に直接伝授する・お聞きできる、最後の舞台であった。

中村館長は、自分と博物館との出会いから、勤められてきた北海道開拓記念館・同開拓の村、築き上げた上湧別町ふるさと館JRY、心血を注いでいるアイヌ民族博物館等を素材に「地域を教材として地域住民に提供、郷土愛を涵養し未来創造に資することが、博物館の目的」であり、「郷土は個人が生まれ育った所であり人格の基礎を形成した所。そして生涯生存の拠点であり存在を証明する場所である。そのために博物館教育が必要」などと話された。さらに「博物館は全ての課題を解決する機能を持っており、その中心となるのが学芸員である」とも述べられ、これからは誇りをもって仕事に邁進すべくご教示いただいた。

60分という講演時間が余りにも短く感じられるほど、長い経験に培われ、裏付けられた実践体験と、信頼性に満ち満ちた先生の人となり、加えて人を引き込む小気味良い話術など、どれもこれも、今に生き、未来に向けて前を向き進んでいかねばならぬ、われわれ学芸員にとっての大きなスキルとなり、道標ともなった。



中村齋氏による博物館学芸員に向けたメッセージ

また、その後のフォーラムでは、元市立函館博物館の学芸員で、現在は北海道教育大学函館校の根本直樹准教授の進行により、堰を切ったように多様な意見が飛び出し、あえなく時間切れとなるほどの熱の入った意見交換となり、私も含め、中村館長の弟子達が、そこかしこで広くしっかりと育っていることを肌身で感じた。

一方、翌日の野外演習では、午前中一杯、様々な伝説を帯びた知内の史跡を散策し、本州並みの著名な歴史を有する北海道らしからぬ道南の風景と歴史の息吹に思いを馳せることができ、天候にも恵まれて、心に残る素晴らしい研修会となった。

今年度の学芸職員部会の主な取り組みとしては、新春の開局に向けた「北海道博物館協会ホームページ」の早急な準備のためのプロジェクトチーム結成や、加盟館園が一同に参加できる場の創設など、会員の微減も相まって課題は山積しているものの、どうか西谷榮治部会長、中岡利泰事務局長を中心に盛り上げ、ちっぽけな自分の仕事？だけではなく、部会のためにも精一杯やっていきたいと思った。

来年度の総会・研修会は、資料や情報のデジタル化をとことん学ぶべく、ホームページの運用等で早くからご協力をいただいている稚内北星学園大学を会場に開催する予定。「地域住民のために強い意志をもって取り組み、来年も集おう！」として、盛況のうちに知内大会を終了した。

最後に、ホストの高橋豊彦学芸員はじめ、激励いただいた教育長様・社会教育課のみなさまに御礼申し上げます。また、中村齋さんはこれからはしばらくの間は白老町にお住まいになられるので、何かあったらお気軽にご連絡をとのこと。今後とも未永くご指導のほど、お願い申し上げます。



高橋豊彦学芸員による砂金掘り跡地での解説

(北海道博物館協会学芸職員部会副部会長
仙台藩白老元陣屋資料館学芸員 武永 真)

青少年科学館
News

科学に興味をもってもらおう 理科授業 科学センター学習

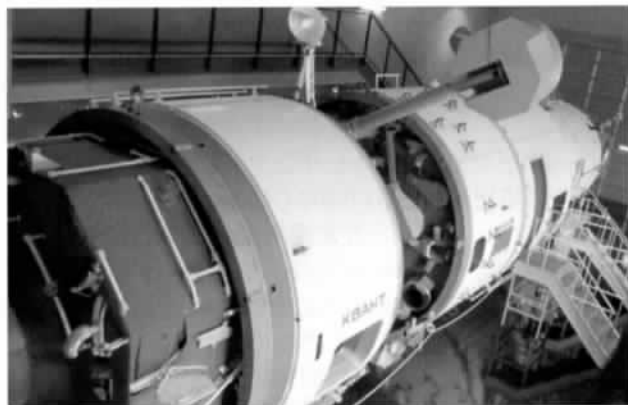
ソ連の宇宙ステーション「ミール」の予備実機が寄贈されてから、苫小牧市科学センターでは「科学センター学習～宇宙教室～」を展開しています。

授業では「ミール」の中に乗り込み宇宙での生活の一部を実際に体験します。小学生ではなかなかイメージのわからない宇宙を身近に感じてもらえるよう教材を工夫しています。宇宙を感じる身近な素材として、牛乳もあります。みなさん牛乳パックを良く見たことはありますか？実はいくつかの牛乳には「HACCP」というマークがついています。これは宇宙に食事を運ぶために考えられたシステムを地球の食品にも利用するように応用したもののなのです。牛乳と宇宙はまったく関係のないことのように思いますが、このような視点からも宇宙は関係していることを知ってもらい身近に感じてもらうようにしています。

「ミール」が苫小牧に来たのは平成10年のことですが、それよりも前から「科学センター学習」は展開していました。その歴史は当センターが青少年センターとして開館した昭和45年から長く続いています。

この事業が始まった当初の主旨として、当センターの諸施設・設備を利用して、学校では行いにくい理科教材について、深まりのある指導を学級単位で行うことが上げられています。また、児童が学校外へ学級単位で出かけることで施設の適切な利用という学習も兼ねていたようです。

宇宙という視点からの授業を行うことで、学校で行っている普通の授業とは異なった観点から科学に興味を持ってもらうよう取り組んでいます。科学センター学習で市内の小学生に授業を行うことで、一人でも多くの子ども達に宇宙を身近に感じてもらうことができるよう今後も授業を展開していきたいと思っています。



(苫小牧市科学センター 松永明子)

美術館
News

A★MUSE★LAND★TOMORROW 2009 ANIMAL FANTASY イヌイト・アート&動物たち

本展は、動物を題材にしたイヌイト・アート89点と、現代日本の作家たちが動物を表現した作品75点をあわせて紹介する内容です。

以前はエスキモーとも呼ばれたイヌイトの人々は、カナダ、グリーンランド、アラスカなど広く北極圏に住む人々です。このうち、カナダでは、1950年代からカナダ人の芸術家ジェイムズ・ヒューストンの尽力によって、多くのイヌイトが石彫、版画の制作に携わるようになり、その魅力が国際的に知られるようになりました。それらは芸術的価値を持つだけでなく、急速にイヌイトの社会に入り込んできた欧米の貨幣経済の中で、生活に苦しむ彼らの経済的な支えともなったのです。イヌイト・アートの特色は、自然と非常に密接な生活を営む彼らの伝統をうかがわせるもので、民族的・宗教的でファンタジックな表現により、世界の人々を魅了しました。本展で紹介する作品は、北海道立北方民族博物館のコレクションが中心です。

同時に紹介する現代日本の作家たちは、江本創(立体)、大森暁生(木彫)、岡村桂三郎(日本画)、小林敬生(木口木版)、土屋仁応(木彫)、手島圭三郎(木版画)、富谷悦子(エッチング)、三沢厚彦(木彫)、山本麻友香(油彩)の9人です。世代は20歳代から70歳代までと幅広く、技法も多彩な分野にまたがっています。これら現代日本の作品は、日常的には自然と切り離された現代社会の中から生まれたもので、イヌイト・アートとはある意味で対称的な環境から生まれたものと見られがちです。しかしながら、本展で出品されるイヌイト・アートは、イヌイトの伝統的生活に現代文化が大きく影響を及ぼすようになった1970年代から90年代にかけて制作されたものが大多数であり、両者の間には擬似的な表現もうかがえます。それは動物表現の可能性をさぐる上で興味深い点となるでしょう。同時に、本展は、さまざまな動物表現を理屈抜きで楽しめる美術入門にはうってつけの内容です。美術鑑賞の魅力を子どもたちに広く伝えるため、札幌市内の小学校2校と連携した教育プログラムを会期前から会期中にかけて展開します。

(北海道立近代美術館 学芸第一課長 新明英仁)

館園の主な展覧会と普及事業

(2008年11月～2009年3月)

石狩

- 円山動物園 (011-621-1426)
 11/9・23 大人の一日飼育員
 12/23 恋人たちのクリスマスナイトZOO
 12/26・27 冬の日飼育係、小学校4～6年生対象
 (各日12名定員)
 1/11～2/22までの毎日曜日
 円山動物園サンデーセミナー
 1/17～2/11 動物のウンチをくらべてみよう!
 北海道立近代美術館 (011-644-6881)
 12/9～1/25 特別展「ANIMAL FANTASY
 イヌイット・アート&動物たち」
 2/7～4/12 特別展「セザンヌ礼讃展」
 北海道開拓記念館 (011-898-0456)
 11/15・29・12/13 古文書講座「古文書に親しむ・
 秋の陣(全3回)」
 12/7 歴史講座「北の海に賭けた越後の男た
 ちー松川弁之助の北蝦夷地漁場開設」
 2/7～3/31 テーマ展「昭和の試み
 ー札幌焼の復活ー」
 札幌市豊平川さけ科学館 (011-582-7555)
 12/7・21 (全2回) さけ皮で靴づくり
 いしかり砂丘の風資料館 (0133-62-3711)
 12/～3/ 資料館のお宝展
 北海道立文学館 (011-511-7655)
 1/4～1/15 知床断章 詩と書のであい
 1/31～3/29 企画展「文学の鬼を志望すー八木義徳」
 三岸好太郎美術館 (011-644-8901)
 11/1～1/18 所蔵品展「三岸の魅力再発見!ー素描
 から《飛ぶ蝶》まで」
 1/23～3/27 所蔵品展「旅愁ーロマンチストがみた
 風景」
 札幌市青少年科学館 (011-892-5001)
 1/4～18 冬の特別企画「サイエンジャー」
 1/11・12・31・2/28 サイエンジャー科学教室

後志

- 西村計雄記念美術館 (0135-71-2525)
 10/24～3/15 開館8周年記念展「re ve eーニシムラ
 の夢ー」
 (財)北ーヴェネツィア美術館 (0134-33-1717)
 12/1～3/13 開館20周年記念特別展「ルチオ・ブバッ
 コとカーニバル展」
 3/14～5/末 特別展「大飾り脚ガラス展」
 小樽市総合博物館 (0134-33-2523)
 8/30～12/7 特別展「ピリカ・モシリ 現代に生き
 るアイヌ工芸」
 11/3 鉄道模型展示と走行会
 11/13～11/23 自由研究作品展
 11/15 「刈りとった羊毛で毛糸を作ろう」ー第
 2回羊毛を染める

- 11/16 学芸員リレー講座「オタル」の生まれ
 た場所 新川河口の自然

渡島

- 七飯町歴史館 (0138-66-2181)
 11/16 歴史講座「葉草について」
 12/1～2/4 テーマ展「いろいろな野鳥(仮)」
 北海道立函館美術館 (0138-56-6311)
 12/6日～3/22日 特別展「三箇三郎展」

胆振

- 室蘭市民俗資料館 (0143-59-4922)
 11/ とんてん館寺子屋教室「干支凧づくり」
 12/ とんてん館寺子屋教室「しめ縄づくり」
 登別市郷土資料館 (0143-88-1339)
 2/1～3/3 お雛様人形展とひな人形作り

日高

- 日高山脈館 (01457-6-9033)
 2/15 ネイチャーセミナー「スノーシューで
 雪山散策」
 3/22 ネイチャーセミナー「シラカンバの樹
 液はどんな味？」

上川

- 中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館 (0166-52-0033)
 1/31～3/29 収蔵品展
 名寄市北国博物館 (01654-3-2575)
 11/13～12/7 企画展「電蓄・ラジオ・ステレオ展」
 2/6～3/1 特別展「冬眠」
 3/19～3/31 企画展「新着資料展」

網走

- 北海道立北方民族博物館 (0152-45-3888)
 10/31～11/30 ロビー展「世界の口琴」
 博物館網走監獄 (0152-45-2411)
 11/23 体験講座「親子で大豆を加工しよう」
 1/1 体験講座「絵馬づくり」
 1/18 体験講座「手織り体験」
 北網圏北見文化センター (0157-23-6742)
 11/15～12/13 企画展「N.P.blood21Vol.3岡田卓也
 展」
 12/18～1/25 企画展「N.P.blood21Vol.4野又圭司展」
 紋別市立博物館 (0158-23-4236)
 2/7～3/8 写真展「オホーツク紋別の冬」
 美幌博物館 (0152-72-2160)
 12/14～1/25 企画展「寄贈美術資料展②」

十勝

- 帯広百年記念館 (0155-24-5352)
 11/15 博物館講座「カエルはみんなの先生だ」
 12/20 博物館講座「大地が語る十勝の自然史」
 1/17 博物館講座「アイヌの人たちの食文化」

釧路

- 釧路市立博物館 (0154-41-5809)
 11/15～12/21 企画展「炭鉱(ヤマ)の語り部 山本作
 兵衛の世界」

根室

- 歴史と自然の資料館 (0153-25-3661)
 11/21 歴史と自然の資料館講演会